3．平成19年度10年経験者研修（12年目研修）に関するアンケート調査分析

－アンケート調査の結果とその分析－

岐阜大学教育学部教員研修計画委員会副委員長　松　永　洋　介
同　委員　尾　高　広　昭

1．はじめに

昨年度に引き続き，岐阜大学教育学部で行われている現職教員対象の10年経験者研修について，研修教員と大学教員双方に対して無記名アンケート調査を行った。ここでは，その調査結果とその分析について述べる。研修教員対象のアンケートについては，質問項目を若干変更した。昨年度は無かった，職場において授業等について相談するか等の項目を新設した。また，岐阜大学教育学部の役割について明確にするため，大学教員に気軽に相談できる体制があればいいと思うか等の質問も行った。大学教員向けについては，昨年度と同じ質問項目とした。研修教員の回答者は196名，大学教員の回答者は68名であった。

研修教員に対する質問項目は，(1)～(11)までの11項目である。(1)～(10)までの質問項目は，当てはまる番号を１つ選んで回答してもらう選択式であり，(11)は記述式で自由に意見を書いてもらうこととした。また，大学教員に対する質問項目は，(1)～(9)までの９項目である。質問項目(1)～(4)及び(6)～(8)は，当てはまる番号を１つ選んで回答してもらう選択式であり，質問項目(5)と(9)は自由記述式である。

以下，２節において研修教員に対する選択式の質問内容とその結果を述べる。また，３節では，大学教員に対する選択式の質問内容とその結果を述べ，研修教員の結果との比較を行う。なお，記述式の回答については，様々であり，今後の研修のあり方についての参考意見とするにとどめ，ここでは触れないこととする。

2．研修教員に対する選択式の質問内容とその結果

以下に研修教員に対して行ったアンケートの結果を示す。

質問内容によって項目を分類した。項目は，【校種･研修コース】，【大学研修に対する期待･ニーズ】，【大学研修に対する成果･評価】【大学教員に対するニーズ】，【大学について】の５つから成っている。

以下に各質問項目とともに回答結果を示す。

【校種・研修コース】

(1) 勤務先の校種をお答えください。

1　小学校　2　中学校　3　高等学校　4　特別支援教育学校

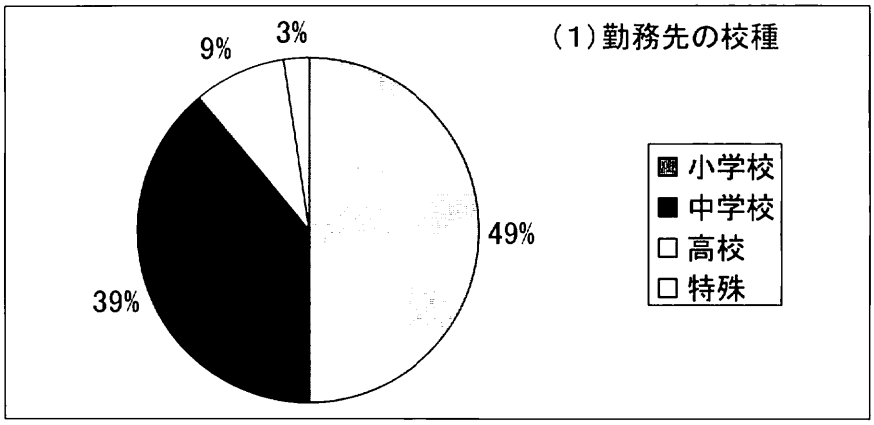


図1

研修教員の勤務先の校種は，小学校が最も多く49％，中学校教員が39％と，義務教育段階の教員が約9割を占めている。昨年は小学校47％，中学校29％，高等学校18％，特別支援学校６％であった。したがって，中学校，高等学校の教員比率が高くなっていることが伺える。事前に校種別の教員の人数を把握しておくことは，大学側で設定する研修コースの内容を決める上で必要であると考える。つまり，大学教員は，研修教員向けに中学生・高校生向けの講座を準備することが，研修教員の意欲を引き出すとともに，満足感のある研修へと向かう第一段階であるといえるだろう。

(2) 研修を受けたキャリアアップフィールドをお答えください。

1　教科教育　2　特殊教育　3　教育相談　4　総合的学習　5　児童生徒の発達理解
6　学校改善　7　学校経営・実践研究法

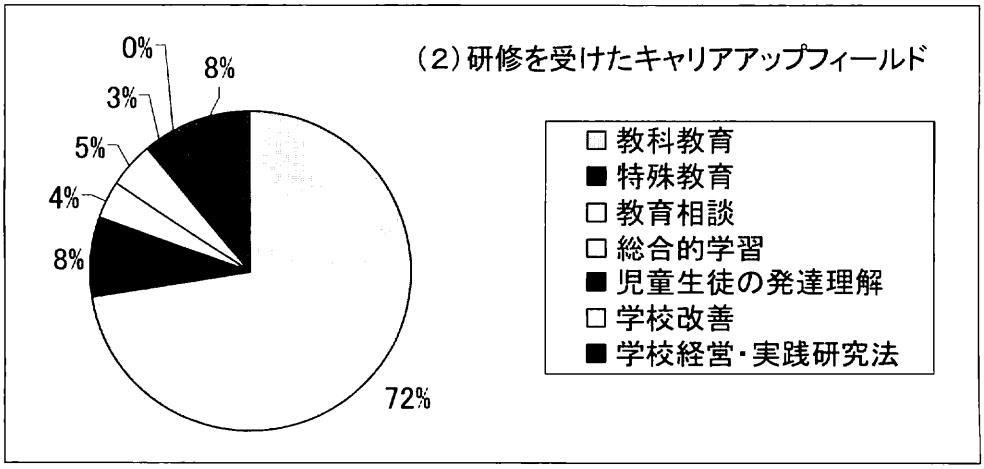


図2

大学側はキャリアアップフィールドを７つ準備した。それぞれのフィールドに，大学教員が準備した各講座があり，それを研修教員は選ぶことになる。

７つのキャリアアップフィールドすべてに選択者があった。

最も多かったのは４年連続「教科教育」であり，72％を占めた。この分野は毎年最も多い希望者が集まる。今年をさかのぼっての３年間の推移は，67％（H18年度），57％（H17年度），62％（H16年度）と漸次増加してきている。ただし，研修教員が実際に選択する基準になるのはキャリアアップフィールドではなく，大学教員がそれぞれ提示するテーマによって決定する場合が多い。そして，そのテーマがどのキャリアアップフィールドに属するかが，この設問項目の数字に反映される。

また，「特別支援教育」と「学校経営・実践研究法」も昨年と同程度の比率であった。しかし，「学校改善」を選択した教員は今年度はいなかった。

【大学研修に対する期待・ニーズ】

(3) そのキャリアアップフィールドを選んだ理由をお答えください。

1　普段の指導において問題意識を強く感じ，今後の改善に生かしたいと考えたから

2　これからの自分の勉強に生かせそうな分野だから

3　所属校との相談によって，今後の校務で必要とされると考えられた分野だから

4　どれでもよかったが面白そうだったから

5　その他

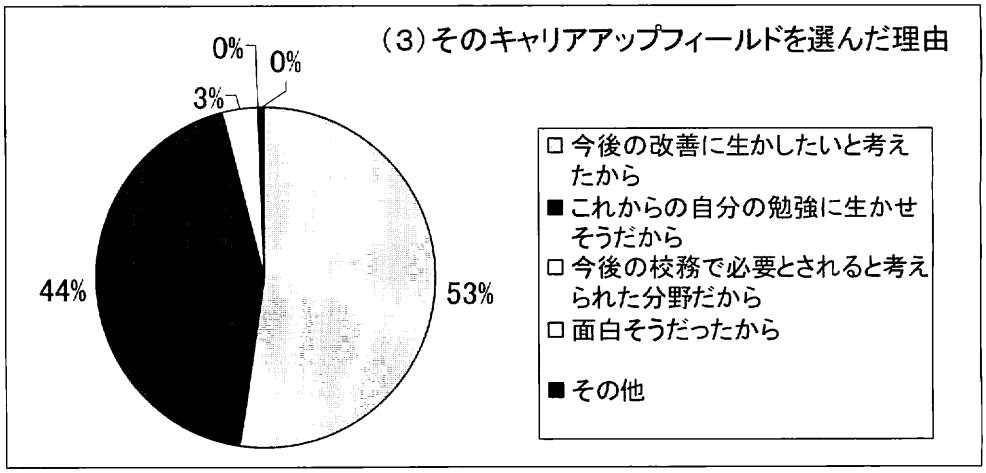


図３

「１」,「２」が多数を占め,両方併せて97％にのぼった（「１」は53％,「２」44％）。昨年度も「１」と「２」を合わせると96％を占め，同傾向を示している。

12年目研修の趣旨から言えば，これらの項目は最も多いことが予想される項目であり，この研修の意義が裏付けられるものであるといえる。

また，「４」を選択した研修教員がいなかったこともこのことを示唆している。すなわち，自分の興味・関心に従って「面白そうだ」と感じたコースを選択するよりも，現在の自分の置かれ

た状況を何とかしたいという意識の表れであると考えられる。いいかえれば、研修教員は目前に切実な課題を抱えており、それを解決することへの関心の方が、提示されたメニューから面白そうなものを選ぶ余裕よりも勝っているといえる。

(4) この研修に対して，あなたが期待していたことはどんなことでしたか（複数回答可）。

1　授業の技術を身につけたい
2　学校づくり・学級経営を考えたい
3　学問的知識を高めたり・専門技能を身につけたい
4　学校の直面する問題に対応できる考え方を身につけたい
5　様々な児童・生徒に対する理解の方法を知りたい
6　学生時代に学んだことを学び直してリフレッシュしたい
7　特に何も期待はしていなかった

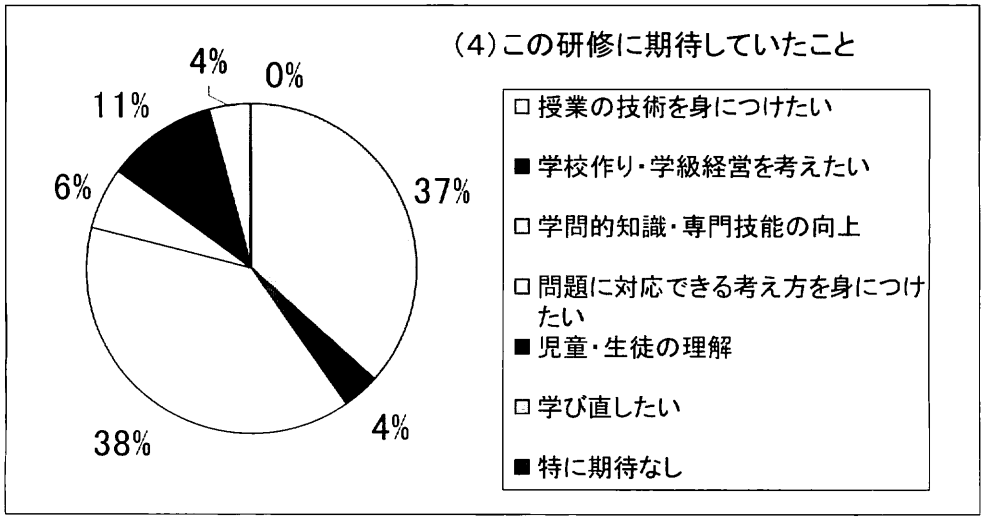


図４

研修に対する期待度を問う設問である。最も多かったのは「３」の38％，第２位が「１」の37％であった。ただ，この質問は複数回答を可としているので，「１」や「３」だけを選んだ研修教員もいれば，「１」と「３」の両方を選んだ研修教員もいる。196人中，「１」だけを選んだのは24人，「３」だけを選んだのは23人であるのに対して，「１」と「３」の両方を選んだのは68人であった。また「１」，「３」を含めて３つ以上選択した人数を加えると全体の６割以上がこの２つを期待していることに挙げていたことになる。この２つはいずれも個人の教師としての指導力向上に関する項目として捉えることができる。したがって，教職経験12年を経過して，これまでの自分の実践を振り返ることから生じた問題意識を反映していると考えられる。

【大学研修に対する成果・評価】

(5) 今回の研修は，自分の課題解決や関心を満足させるものでしたか。

1　とても満足した　2　おおむね満足できた　3　あまり満足できなかった

4　全く満足できなかった

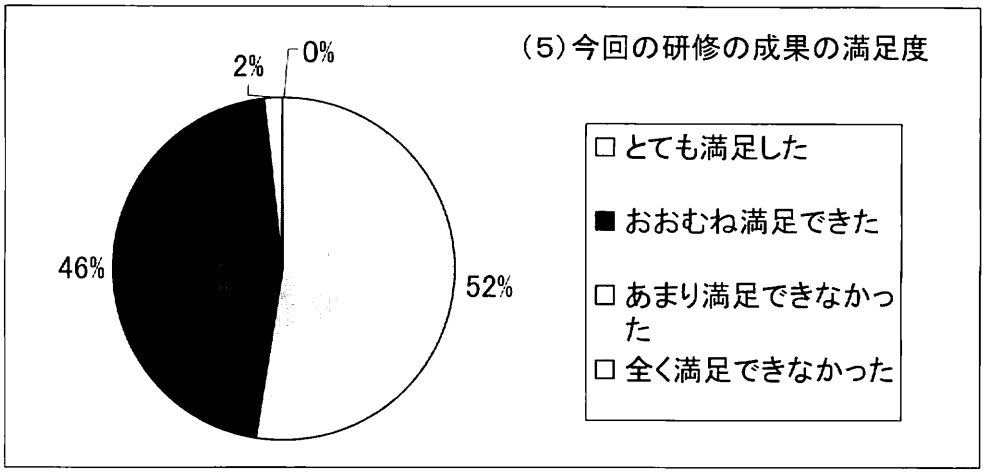


図5

「1」と「2」を合わせると98％と、満足度は高かった。ただし、「2」の「おおむね満足できた」については中身の検証が今後必要となる。なぜならば、本当に満足しているのであれば「1」を選ぶとすれば、「1」を選ぶのを躊躇させる何かがあったと考えることができるからである。この項目は研修の成果の満足度を問うものであるが、それは大学側の提供する内容に対する満足度と、研修教員自らの課題解決に対する満足度との両面を持っている。前者については後述の（11）とも関係してくるが、今後は満足度の中身について分析する必要がある。

(6)　今回の研修は，2学期以降の実践に直接役立つものとなりましたか。

1　とても役立ちそうだ　2　役立つと思う　3　あまり役に立たない

4　全く役に立ちそうにない

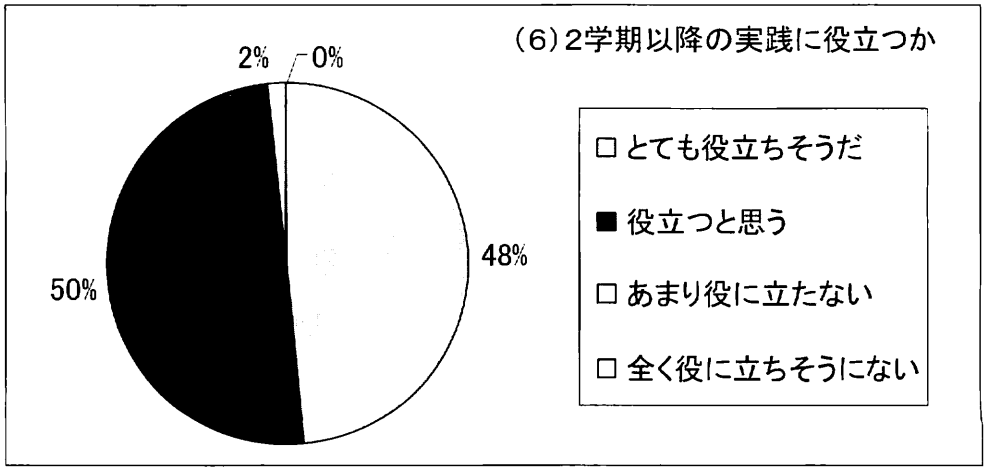


図6

研修を行った夏休み後の2学期の授業において、研修教員が自信を持って実践できるかどうか

についての意識を問う質問である。

「1」,「2」合わせるとほぼ100％となり，昨年と同傾向を示した。ただし，今年は「1」が48％,「2」が50％であったのに対して,昨年は「1」が56％,「2」が44％であった。したがって,「1」については低下した。しかし，(4)の質問項目「3」で「学問的知識を高めたり・専門技能を身につけたい」と回答した教員が多くいたことから考えれば，この研修では即効性を求めるのではなく，何らかの形で授業へと反映していけると考えた研修教員が多かったとも考えられる。

【大学教員に対するニーズ】

(7) 日常の指導における疑問点について，相談したいと思うことはどんなことですか。

1　単元（題材）構成や教材分析　2　授業の指導技術

3　学校経営・学年経営・学級経営の方法　4　学級の児童・生徒の理解方法

5　特別支援教育の方法　6　その他　7　特に相談したいとは思わない

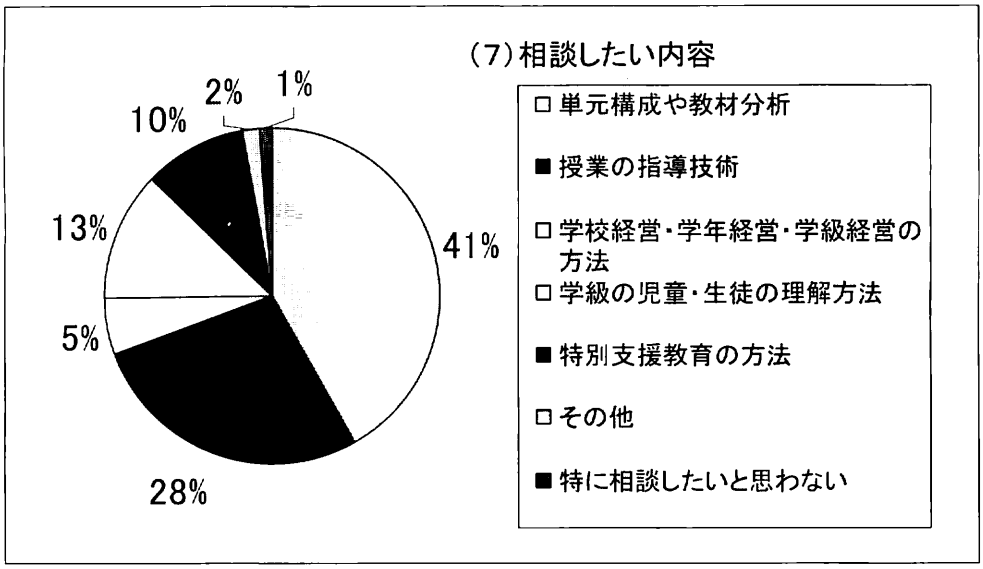


図7

この設問は，研修教員が日常感じる疑問を大学教員に相談する場合に，どのような内容が求められるのかを把握し，それに基づいて潜在的なニーズを掘り起こし，今後の研修コース設定の参考にするための設問である。

図7は複数回答による総合計から算出したものであるが，多い順にベストスリーは「1」の41％,「2」の28％,「4」の13％である。この3つの順位は昨年と同じであり，例年同傾向を示している。これらの項目はいずれも実践的な側面を持っている。それに対して，大学教員の提供する理論的な分野は，例えば「1」の「単元（題材）構成や教材分析」においては，教材を深く捉え，分析するために必要な方法も提示できると考えられる。また,「2」の「授業の指導技術」に関しても，各教科等の特性を深く理解することから生まれる指導技術をつくり出すことに関わってくると考えられる。

さらに「4」の「学級の児童・生徒の理解方法」では，現場で得られる経験的な対処方法だけ

ではなく，専門的な視野からの知見を求めて選択しているのではないかと考えられる。

(8) 現場で日常抱く指導上の問題点等について，主に相談するのは誰ですか（複数回答可）。

1　校長・教頭　2　学年主任　3　その教科・領域の主任

4　先輩　5　同僚　6　その他

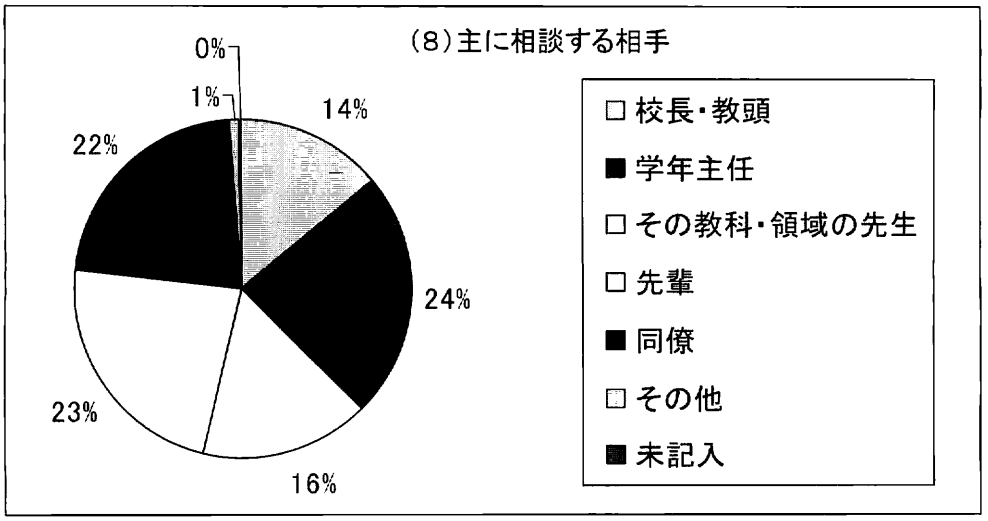


図８

この設問は，大学教員ではなく，職場ですぐに相談できる対象を問うものである。

図８は複数回答によるものであるが，「２」，「４」，「５」がほぼ近い数値を示した。学年主任が，先輩や同僚とほぼ等しい数値を示すのは，同学年としてチームを組んでいるためであると考えられる。学習進度や担当している子どもについて，折に触れて話し合う機会があったり，学年会などで互いに連絡し合いながら行っていたりすることが大きいと考えられる。

また，「教科・領域の主任」や「管理職である校長・教頭」は第２グループとしてほぼ同じ割合を占めている。

複数回答ではあるが，研修教員は何らかの形で相談する対象があることが明らかになった。ただし，この設問からは，相談相手に選んだ理由が，専門的な助言を求めてのことなのか，普段の人間関係によるものなのかは読み取れなかった。

(9) (7)であげた日常の指導において感じた疑問点などを，大学教員に気軽に相談できるシステムがあれば利用したいと思いますか。

1　ぜひ利用したい　2　内容によっては利用したい　3　あまり利用したくない

4　全く期待しない

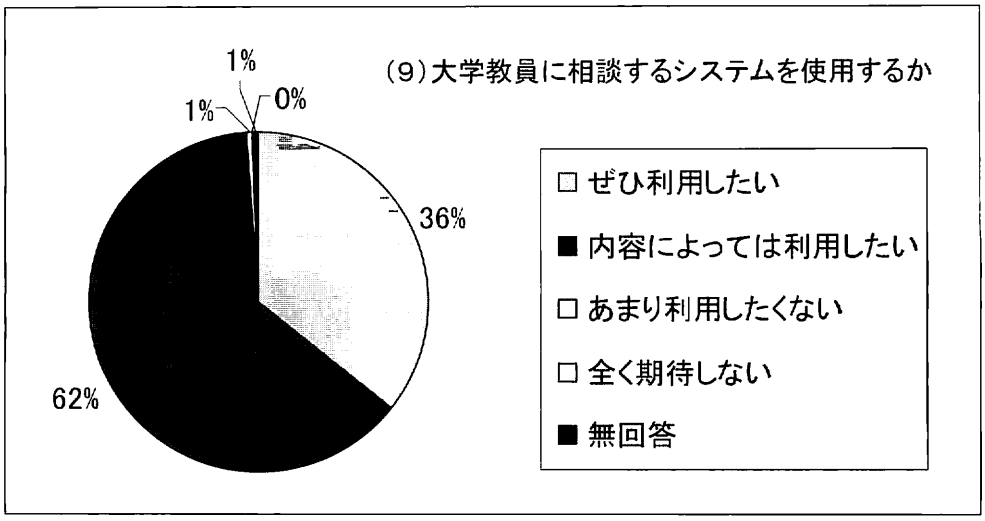


図9

前の設問(8)では，研修教員の疑問の相談対象を現職教員に絞ったが，この設問では大学教員が相談相手になりうるのかということを問うことを目的とした。

結果は「1」が36%,「2」が62%であった。昨年は「1」が43%,「2」が57%であったので，「1」よりも「2」の方が多いという傾向は変わっていない。

「1」よりも「2」の方が多いのは，各研修教員が，相談内容によってその対象を大学教員にするか，身近な職場の現職教員とするのかを意識しているからであると思われる。

また，この設問は「気軽に相談できるシステムがあれば」という仮定条件に基づいているが，現在利用可能なのはAIMSが中心である。しかし，中には直接来学して話をしながら相談を受けたいという希望も多いのではと考えられる。この面については来年度の質問項目で追究する必要がある。

(10) 「3　あまり利用したくない」「4　全く期待しない」と答えた方のみ，その理由をお答えください。

1　大学教員よりも現場教員の方が信頼できる　2　学校外に相談するのは面倒だ

3　距離的に遠い　4　時間的な余裕がない

5　電話ならよいが，メールを打つのが面倒だ　6　その他

この設問は(9)で「3」,「4」を選択した研修教員を対象としたものである。「3」を選択した研修教員は1名であり，その理由は「距離が遠い」というのが理由であった。

このことは，メールや電話よりも，直接大学へきて気軽に相談したいという意志があることを示している。このような潜在的な需要は他にも多くあると考えられる。

【大学について】

(11) 今回の研修を通して，大学教員はあなたに有益な示唆をもたらすことができましたか。

1　たいへんよかった　2　まあまあよかった　3　あまりよくなかった

4　まったくよくなかった

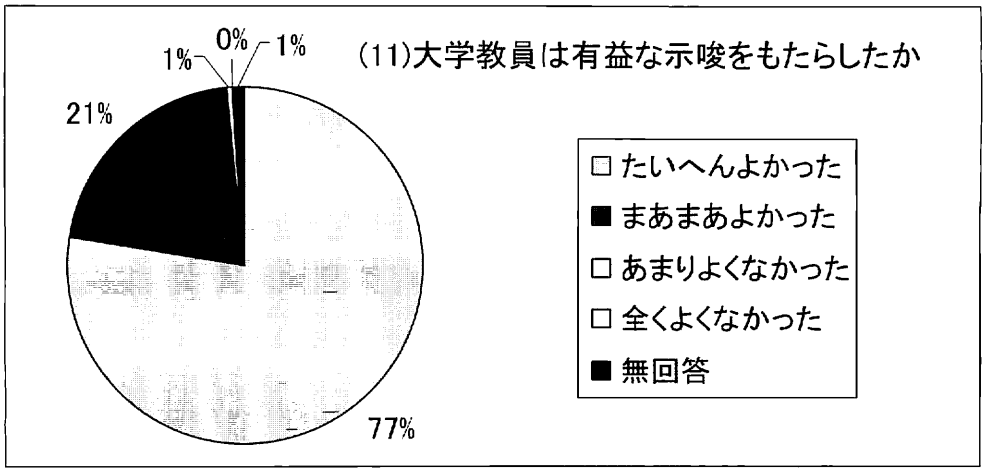


図10

「1」が77%,「2」が21%であり,昨年度に比べて「1」がやや減少した。昨年と比較すると「1」は84%から77%に減少したのに対し,「2」は16%であったのが21%に増加した。すなわち,「1」の減少分はほぼ「2」へ吸収されたということである。このことは大学教員の提供するコースでの内容が研修教員に十分ではなかったことを示すものなのか，研修教員の評価が辛口であったことを示すものであるのかはこの設問からは読み取れなかった。

(12) 今回の研修を通して，岐阜大学に対する印象は変わりましたか。

1　よくなった　2　かわらない　3　わるくなった

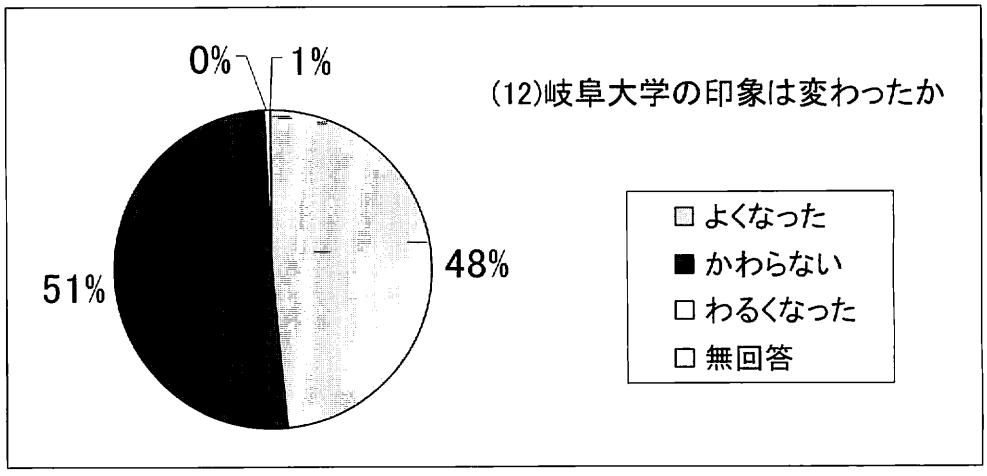


図11

研修教員が12年目研修を通して岐阜大学に対するイメージをアップさせたかどうかを問う設問である。「1」が48%,「2」が51%であり,無回答が2名であった。昨年度は「1」が59%,「2」が40%であったことから比べると，「1」では減少したものの「2」ではその減少分がそのまま増加した。

この回答項目「2」の解釈については，「以前からよい印象を持っていて今も変わらない」の

か「以前からよくない印象を持っていて変わらない」のか、あるいは「特に印象に残ることはないが、今回も変わらなかった」のかという判断が求められる。この中でよくない印象を持っていることについては、設問(5)から考えるとあり得ない結果となる。また、「特に印象に残ることはないが、今回も変わらない」という解釈も、設問「5」及び「11」から考えるとそうは思えない。一方、本学卒業生で、「よい印象を持っていたので変わらない」という回答もあった。したがって、もともと岐阜大学に対する好感度があったため、「変わらない」という選択をしたと考えてよい。

(13) 現職教員として、大学院への入学をお考えですか。

1　入学したいと考えている　2　今回の研修を受けて、志望の気持ちが生まれてきた
3　入学したいと考えているが様々な理由から難しい　4　入学したいとは思わない
5　その他

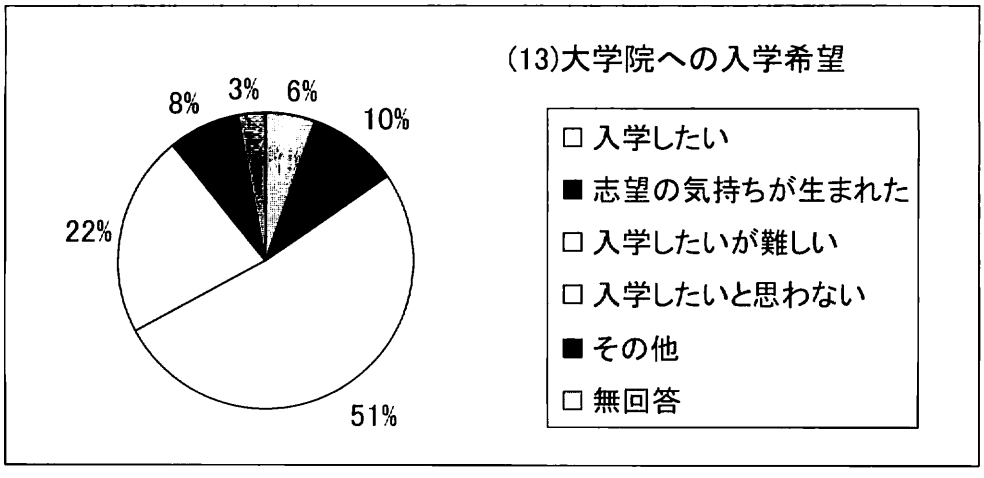


図12

今年新しく設けた質問である。今回の研修が、さらなる研究意欲を生かして大学院進学につながるのかどうかを調べ、教職大学院やカリキュラム開発等への潜在的な需要を探るものである。

入学したいという気持ちを持っているのは「1　入学したいと考えている」「2　今回の研修を受けて、志望の気持ちが生まれてきた」「3　入学したいと考えているが様々な理由から難しい」の3項目であると考えられる。この3つで67％を占めた。そういう意味では、潜在的な需要は存在しているといえる。しかし、「3　入学したいと考えているが様々な理由から難しい」と回答した研修教員が51％であったことを考えると、大学院への入学志望がそのまま願書提出へと結びつかない条件が存在していることが明らかになった。今回の設問ではその理由まで問うていないが、校内事情、通学のための距離、家庭事情等が考えられる。いずれにせよ、そうした障碍を取り除くためのサポートをすることも今後検討していかなくてはならない。

一方、「4　入学したいとは思わない」と回答したのは22％であった。その理由がすでに大学院を卒業したからなのか、大学院に魅力を感じなかったからなのか、あるいは他に理由があるからなのかはこの設問からはわからなかった。

しかし、ほとんどの研修教員は、研修終了後も何らかの形で大学と関わることを望んでいる（設

問９）ことから，今回の研修を通して得たものを発展させるために，大学院での研修へと結びつけることは，教師の力量形成に大きく関わっていけると考える。

３．大学教員に対する選択式の質問内容とその結果，及び研修教員の結果との比較

以下では，選択式の質問項目(1)～(4)及び(6)～(8)の質問ごとに，質問内容，選択肢，回答結果を示す円グラフを示してある。なお，質問内容によって項目を分類し，【研修コース】が(1)，【大学研修のねらい】が(2)，【大学研修の成果】が(3)，(4)および(5)，【大学研修の方法】が(6)および(7)，【研修教員の印象】が(8)，【研修全体】が(9)となっている。

【研修コース】

(1) 担当したキャリアアップフィールドをお答え下さい。

１．教科教育　２．特殊教育　３．教育相談　４．総合的学習　５．児童生徒の発達理解
６．学校改善　７．学級経営・実践研究法

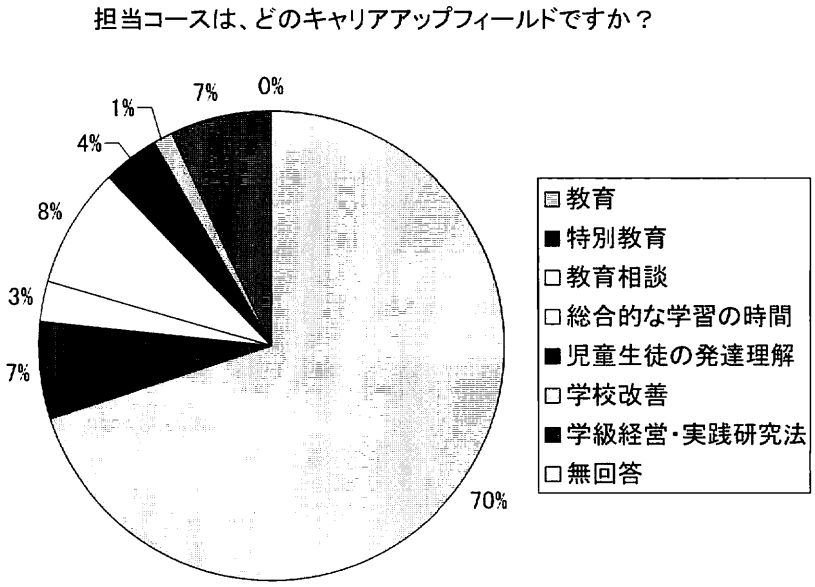


図１　担当した研修コース

質問(1)の「担当したキャリアアップフィールド」に対する回答結果を図１に示す。この結果より，70％（H18年度57%，H17年度52%，H16年度64%）の大学教員が教科教育を担当したと回答している。次いで，８％（H18年度13%，H17年度12％，H16年度11％）が総合的学習であり，教科教育を担当した大学教員の割合が高いことがわかる（４年間同様の結果）。

この結果の要因は，第一に大学教員が研修教員の要望を考慮したため，第二に大学教員が現職教員に必要なキャリアアップフィールドを教科教育と判断したことが考えられる。

【大学研修のねらい】

(2) どのような期待やねらいを計画し，今回の大学研修のコース担当にのぞみましたか？

1．専門的知識や情報を獲得させる
2．子どもへの関わり合いを深める授業の力量形成
3．教科の教材研究
4．変わりつつある児童生徒に対応できる考え方の養成
5．経験を積んだ教師のスタンスを問い直す契機
6．教育現場の様々な課題を解決
7．学校づくりや学校経営
8．大学院志望の動機付け
9．その他

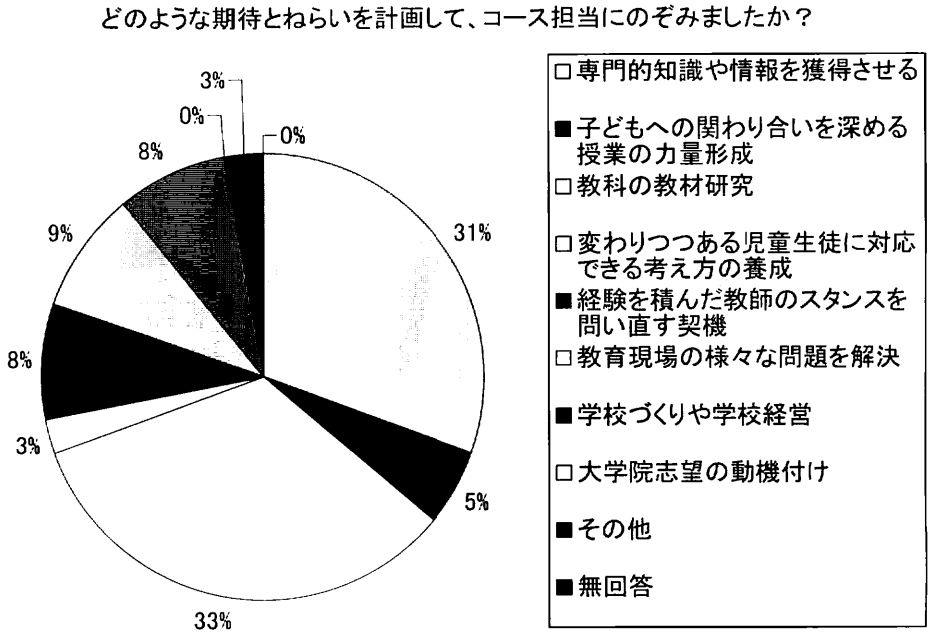


図２　大学教員の研修のねらい

質問(2)に関する，「大学教員の研修のねらい」に対する回答結果を図２に示す。これより，大学教員は研修のねらいを第一に33％（H18年度32%，H17年度23％，H16年度24％）が教科の教材研究，第二に31％（H18年度27%，H17年度27%，H16年度30%）が専門的知識を獲得させ，新しい情報を知らせることを挙げていた。この結果と現職教員の結果より，大学教員と現職教員の期待やねらいはほぼ一致していることがわかった（４年間同様の結果）。

大学教員と現職教員は，学校教育の現場で活用できる知識や情報の獲得，教師としての力量形成を大学研修の目標としていた。

【大学研修の成果】

(3) 研修教員とのかかわりのなかで，教育や研究のために意味がありましたか？

1．とてもそう思う　2．そう思う　3．あまりそう思わない　4．全くそう思わない

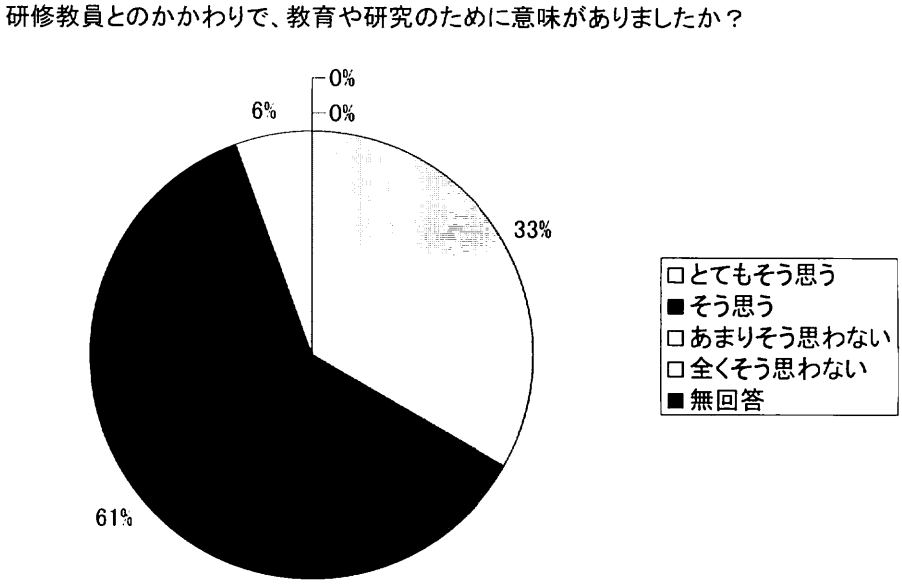


図３　大学研修の担当による意義

質問(3)の「大学研修の担当による教育や研究への意味」に対する回答結果を図３に示す。この結果から，33％（H18年度32%，H17年度30％，H16年度28％）がとてもそう思う，61％（H18年度57%，H17年度58%，H16年度64%）がそう思うと回答しており，全回答者の94％（H18年度89%，H17年度88%，H16年度92%）が「とてもそう思う」「そう思う」と大学研修の意義（教育や研究の意味）を評価していることがわかった（４年間同様の結果）。なお,「全くそう思わない」の回答は０％であった。

(4) 大学教員に対して，学校現場に直接つなげられる指導ができましたか？

1．とてもそう思う　2．そう思う　3．あまりそう思わない　4．全くそう思わない

質問(4)の「学校現場につなげられる指導ができたか」に対する回答結果を図４に示す。指導ができたかに関しては，回答結果の23％（H18年度24%，H17年度30%，H16年度19%）が「とてもそう思う」，69％（H18年度66%，H17年度57%，H16年度72%）が「そう思う」と回答した。大学教員は，経験を活かしつつ自信の持てる研修を実施できたことが，回答結果より推察できる。

研修教員の回答結果と比較すると，「とてもそう思う」と回答したのは，指導した大学教員は23％，研修教員48％であった。この結果より，大学教員は自分の指導に関して厳しい自己評価をしていることがわかる。

ただし，学校現場につなげられる指導ができたについて「とてもそう思う」「そう思う」と回

答した大学教員は92％，研修教員は98％であった。

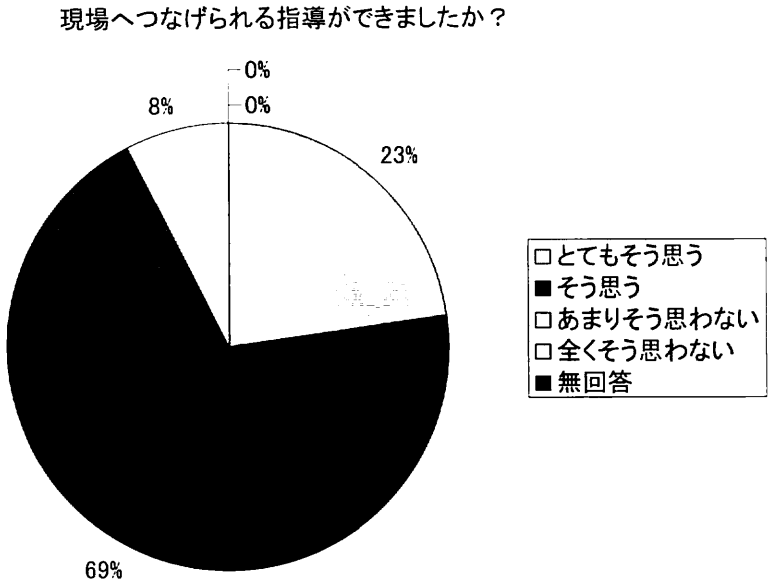


図４　学校現場につなげられる指導ができた

【大学研修の方法】

(6)　大学の設備・施設（附属図書館，ブラックボード，AIMS-GIFU など）を利用しましたか？

1．良く利用した　2．時々利用した　3．あまり利用しなかった

4．全く利用しなかった

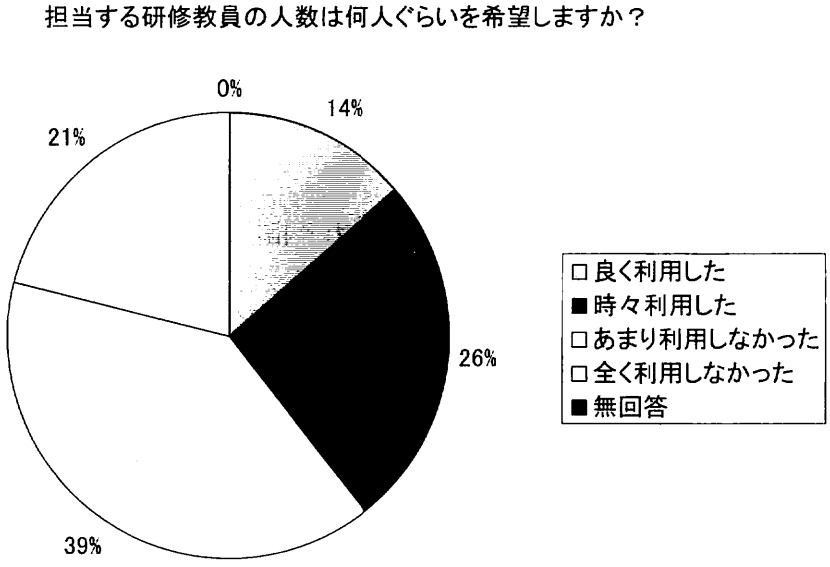


図５　大学の施設・設備の利用

質問(6)の「大学の設備・施設を利用したか」に対する回答結果を図５に示す。その結果，あま

り利用しなかったが最多で39％（H18年度42%，H17年度38%，H16年度42%），次いで全く利用しなかったが21％（H18年度31%，H17年度24%，H16年度42%），時々利用したが26％（H18年度19%，H17年度27%，H16年度14%）である。

岐阜大学の施設・設備の利用率が低い原因は，平成18年度と同様に，研修教員の勤務校の情報化に関する施設・設備の影響や使い勝手の良い携帯電話等による電子メールの活用が優先された結果と考えられる。さらに，研修教員が校務や夏休みの部活動の指導，研究会等のために，非常に多忙であることが要因として推測される。

(7) 担当する研修教員の人数は，どのくらいが適当だと思いますか？

1．1～3人　2．4～6人　3．7～9人　4．10人以上　5．その他

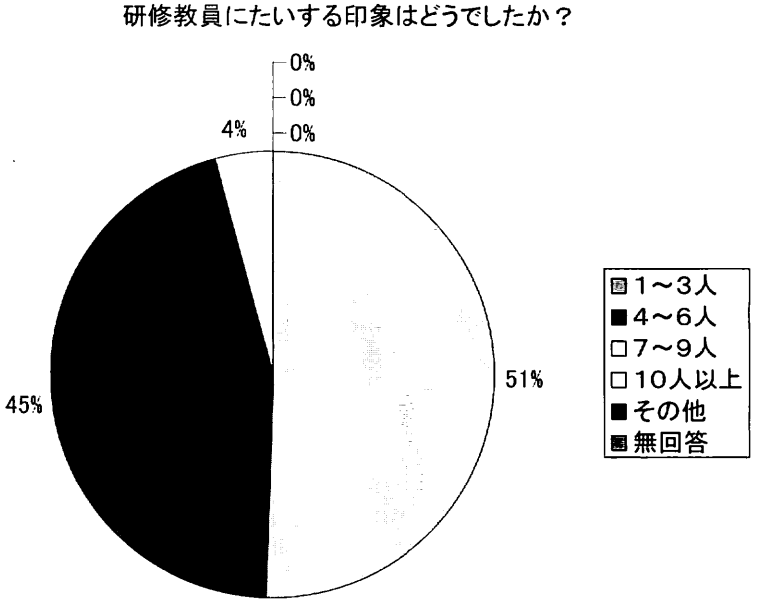


図６　担当する際に希望する研修教員数

質問(7)の「担当する研修教員の人数として適当と思われるのは何人くらいか」に対する回答結果を図６に示す。その結果，グループの研修教員数は，「３人以下」を適当とすると回答したのが51％（H18年度41%，H17年度42%，H16年度11%），次いで「４～６人」を適当とすると回答したが45％（H18年度51%，H17年度52%，H16年年度49%）である。本結果より，大学教員の96％は，担当する研修教員数を３人以下，または４人から６人と回答し，少人数指導を希望していることがわかった。

【研修教員の印象】

(8) 今回の研修を通して，研修教員に対する印象はどうでしたか？

1．非常に良い　2．まあまあである　3．あまり良くない　4．全く良くない

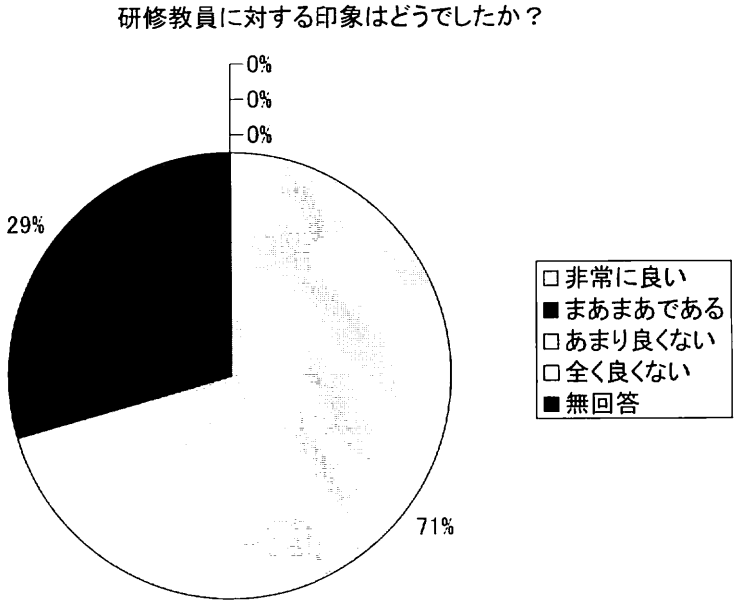


図７　研修教員の印象

質問(8)の「研修教員の印象はどうでしたか」に対する回答結果を図７に示す。この結果から、大学教員の71％（H18年度69%，H17年度61%，H16年度67%）が非常に良い，29％（H18年度30%，H17年度37%，H16年度28%）がまあまであると回答している。

大学教員は，研修教員の研修姿勢や課題意識などを良い印象で捉えていることがわかった（4年間同様の結果）。

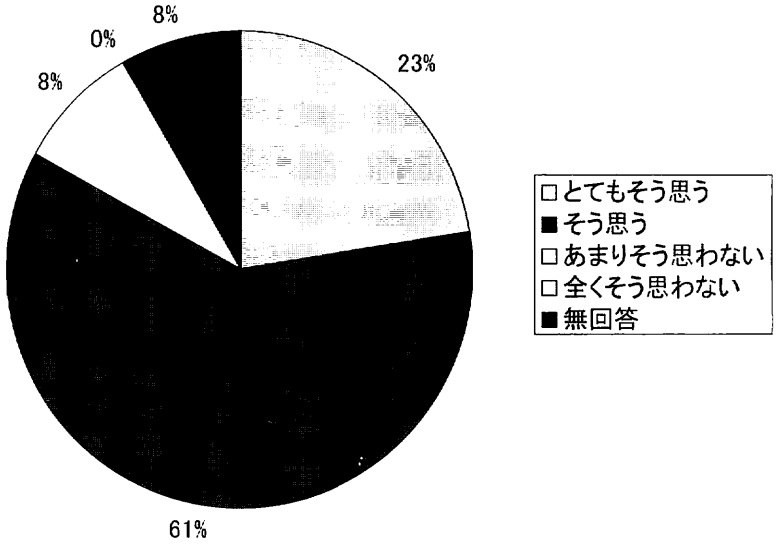
４．終わりに

10年経験者研修は、今年度で５年目である。昨年度に引き続き分析を行うこととなった。これらの客観的な資料を参考にして頂き、より良い研修のあり方を探っていければと考える。

今後は、岐阜大学教育学部の役割もさらに多様化し，様々な分野での貢献が求められるであろう。それらの中でも，岐阜県教員の教育と質の向上という分野は大変重要なものである。10年目経験者研修については、教員の資質向上のために特に重要であり、管理・運営を行う関係機関は、本分析に基づいた改善を絶えず行っていかなければならない。

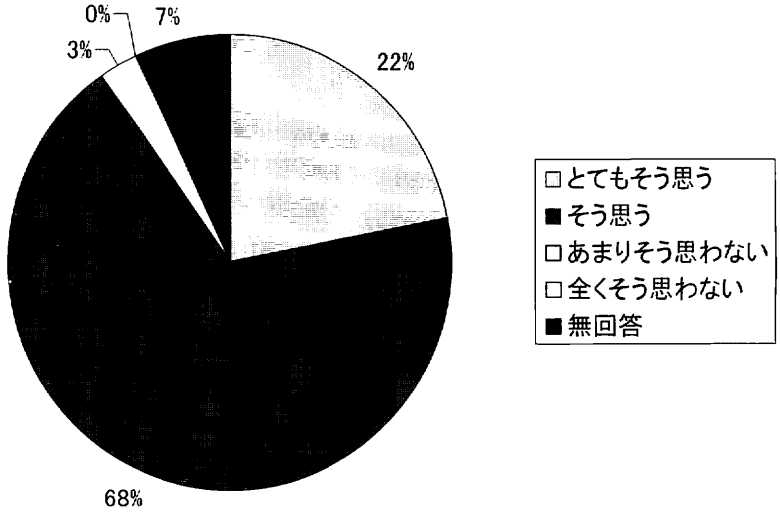
資　料　大学研修に関しての大学教員の意識

研修の趣旨をいかした研修でしたか？



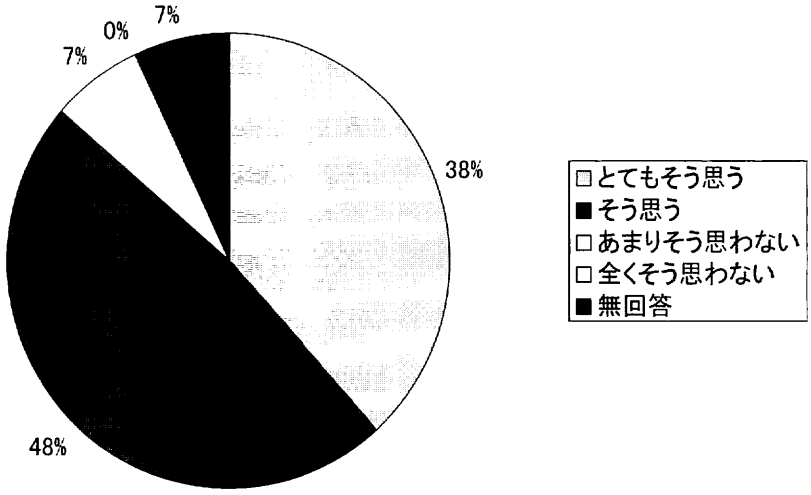
資料１　研修の趣旨

研修教員の課題意識などに即した研修ができましたか？



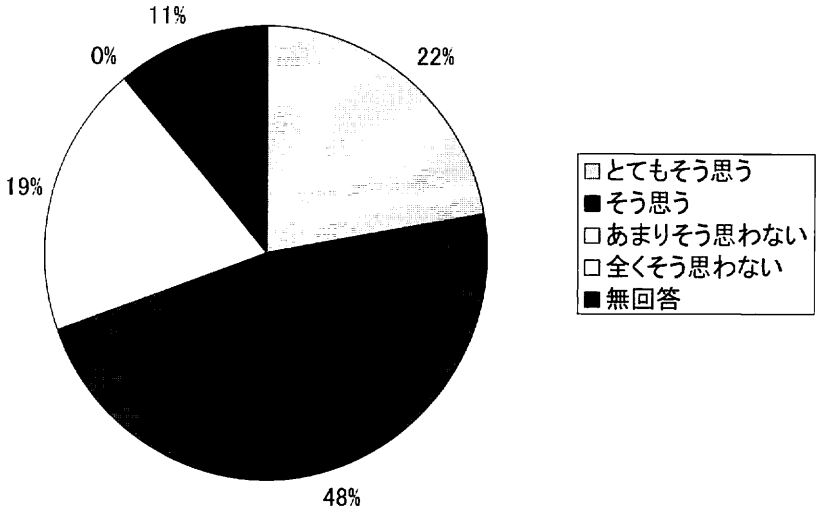
資料２　研修教員の課題意識への対応

研修教員は課題意識をもって大学研修を受講しましたか？



資料３　研修教員の受講実態

研修教員の取り組みの観察のため、勤務校を訪問したいですか？



資料４　研修教員の勤務校への訪問